

夕やけ

松井 とし

職員室の下に掘った穴の中で、うさぎが子どもを産んでいた。後産を流産だと思いこんでいた私たちには、全く夢のような出来事だった。

うれしい驚きもつかの間、朝早く穴の入り口に姿を見せた子うさぎたちは、すぐ穴の中に戻ってしまった。その日はありあわせの物で蓋をして帰ってきたが、翌朝、園の前に住む母親から電話があった。何と、朝日と共に子うさぎがチヨロチヨロ出てきて、猫にねらわれているという。

子うさぎたちの引越しが始まった。母親のルンロンと父親のピーターが、穴の中に入っては子うさぎたちを誘う。子どもたちはピョンコピョンコついて出てくるのだが、すぐにまた住みなれた穴の中に戻ってってしまう。

しかし、うさぎの親は決してあせらない。根気強く、出たり入ったりをくり返してい

る。よく見ると、一回ごとに二〇センチ位穴からの距離がのびている。とうとう、白と黒のパンダを二匹、白毛を二匹、小さなフワフワの子うさぎをそとと抱きとって小屋へ移した。

ところが、残る一匹が出てこない。前日、一番初めに子うさぎを発見したT先生は「五匹いた筈だ」という。ルンルンは何度も穴へ入って、出てくるたびに、私の顔をみる。いぶかしげな表情が何かを訴えている。

「どうしたの？ 赤ちゃんいないの？」

「.....」

ルンルンは、またクルリと向きを変え穴の中へ入っていく。

そんな事を午後いっぱい繰り返して、ルンルンも疲れただろう。園庭の中央にゆったり前足をのびてすわった。ルンルンが身じろぎもせずじっと見つめる西の空には、葉を落とした木々の間から大きな夕陽がぼっかり浮かんでみえた。声をかける事さえはばかれるほどに厳肅なうさぎのたたずまいは、祈る母親の姿であつたらうか。

あの秋の日の静かな夕やけは、私自身の心のいたみと共に生涯忘れられない。

(神奈川県立教育センター)